

---

---

# EIP(企業内ポータル)の可能性と展開

富士ソフトABC 株式会社

---

## ■ 執筆者Profile ■



吉 本 篤

2000年 富士ソフトABC(株)入社  
横浜事業所ビジネスシステム部配属  
2001年 システム事業本部 第3システム部 所属  
2002年 現在, システム事業本部 第5システム部 所属  
EIPテクニカルサポート担当

## ■ 論文要旨 ■

EIPとはEnterprise Information Portalの頭文字をとったもので、つまり企業内ポータルである。ポータルとは“入り口”を指し、Yahoo!、MSNなどのポータルサイトが有名である。このポータルサイトの企業版がEIPである。「ユーザがポータルシステムを利用することによって生産性の向上、利便性の向上につながる。」という、宣伝文句があるが、実際どのようにポータルを使用すればビジネスの向上につながるのか?この論文では実際にメリットを引き出すためのEIP導入方法について、多方面から考察した。

## ■ 論文目次 ■

<b>1. はじめに</b> .....	《 3》
1. 1 情報の肥大化	
1. 2 E I Pの登場	
<b>2. E I Pの導入, 運用</b> .....	《 3》
2. 1 目的	
2. 2 導入	
2. 3 ナレッジマネジメント	
2. 4 ユーザの役割設定	
<b>3. E I Pのアーキテクチャ</b> .....	《 5》
3. 1 基本的な構成	
3. 2 E I Pの技術	
<b>4. E I Pの社内展開</b> .....	《 8》
4. 1 E I Pの完成を目指して	
4. 2 E I Pに期待されていること	
<b>5. おわりに</b> .....	《 9》
5. 1 課題と可能性	

## ■ 図表一覧 ■

<b>図1</b> EIP実現に向けての構築ステップ .....	《 4》
<b>図2</b> EIPの基本的な構成図 .....	《 5》
<b>図3</b> EIPの画面 .....	《 6》
<b>図4</b> システムアーキテクチャ .....	《 6》

## **1. はじめに**

### **1. 1 情報の肥大化**

現在の E-Business においてより多くの情報は欠かせない存在である。しかしその情報は多方面から取得しなくてはなりません。それがメールであったり、社内イントラネットシステムであったり、インターネットからの情報であったりと社員が複数の膨大な情報源から自分に必要な情報を取得しなくてはならない。その作業にかかる時間、つまりコストは蓄積すれば年間でかなり生じているはずである。この多方面より情報を取得する時間を節約する為に、情報を一元的に扱う為に、総合アプリケーション開発などを、考慮した企業も少なくないはずである。総合アプリケーションとは、様々なアプリケーションや情報が 1 つに統合された環境を指す。

### **1. 2 EIP の登場**

しかし、総合アプリケーション開発は時間的、コスト的に大きな負担になる。そこで近年注目され始めているのが、Enterprise Information Portal(以降 EIP という)である。総合アプリケーションのニーズが高まっている中、ミドルウェアを使って、仮想的にその統合を低コストで実現できることから、EIP への期待は高まっている。だが、この EIP にも落とし穴があり、使い方によっては、効率化はおろか、導入費の無駄遣いで終わってしまう可能性も、持っているのである。

販売元がメリットとして、生産性の向上、ユーザの利便性の向上といった項目を取り上げるが、実際にどう良くなるのかが不明であったり、その項目を重視すべきものが疑問であったり、自社に対して本当に合った提案なのか、色々見えない部分が多い。それでは、使い方により意味のなさない EIP を、どう企業で活用していけば、利点を生かせるか、また技術的にどういった構造で構成されているかを説明しよう。

## **2. EIP の導入, 運用**

### **2. 1 目的**

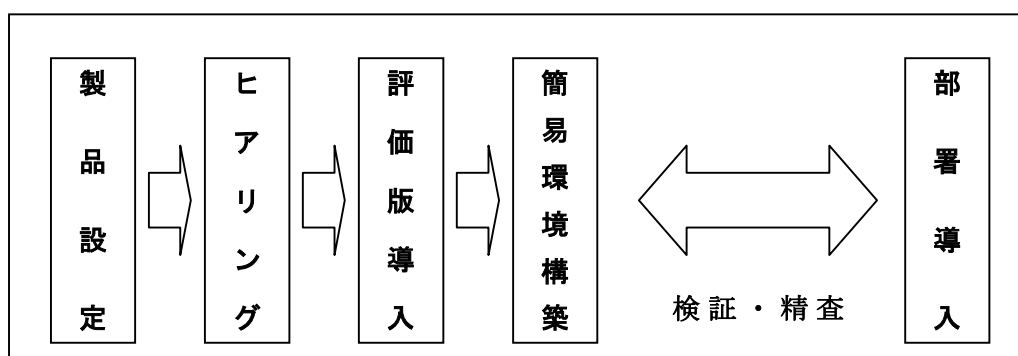
では、具体的にどのように展開すればよいのか考察してみた。EIP を十分に活用するには企業側でも準備が必要になる。つまり EIP の目的である。EIP を利用して何をやりたいのかを、はっきりさせる必要がある。社員同士の情報の共有ポータルと、顧客へのサービスの EIP では、そもそも目的が違うのである。EIP の汎用性に溺れてしまう可能性がある。必ずビジョンを定めて、導入すべきである。そのビジョンも、はっきりしないで導入すれば、ユーザが困惑する。まずは、ユーザを交えた実現のシナリオを明確化し、EIP を導入して何をやるのか？そのビジョン、つまりは、目的を明確にし、導入すべきである。一番自社の目的にあった EIP を、選択しなければならない。

### **2. 2 導入**

そもそも EIP は単体で機能するシステムではない。他のシステムと連携することが重要で、他のシステムとの共存を考えなければ意味をなさないのである。つまりは、他のアプリケーションとの連携が必要である。しかし、他のシステムとの連携といってもそれほど

難しく考える必要はない。自社の環境を見つめ直すことから始めればよいのである。どのようなシステムが、存在しているのかを確認すること。EIP に取り込めるもの、取り込めないものを明確にする。物によっては EIP に、結合するだけで十分に息を吹き返すものもある。

まずは、簡易な環境で構築し、テスト運用することで問題点や実現すべき点を、明確化できる。対象部署も「全社」ではなく「部署」で導入してから、全社展開が望ましい。部門レベルでの検証、精査をする方が、問題発生した場合に、ロールバックしやすいからである。導入へ向けての構築ステップフローは、**図 1** のようになる。



**図 1 EIP 実現に向けての構築ステップ**

いくつかの段階を踏んでいって、EIP を見るものから使うものへ、変化させる。これには全員の意識転換が、必要である。全員で利用してこそ本来の EIP の威力を、発揮できるのである。

### **2. 3 ナレッジマネジメント**

次に考えなくてはいけないのが、情報整理、つまりナレッジマネジメントである。業務遂行で得られた知識をまとめて文書化し、その内容を評価して管理体系のしかるべき場所に保管することである。しかし、ナレッジをただ保管するだけでは、意味をなさないのである。例えば保管されているナレッジの再利用を考えた時である。検索・分類手段を提供するだけではナレッジの再利用は困難を極める。業務コンテキストが欠落しているため、本当に再利用すべき的確な情報であるかどうかの判断が困難になる。ナレッジが単なる個人メモなのか、部門承認済みなのかなどの、問題が発生する。大事なものはコンテンツだけではなく、業務プロセスの進め方自身を決める事である。コンテンツと業務コンテキストの相互の関連を保存し、ナレッジとして利用できる仕組みが、必要である。

### **2. 4 ユーザの役割設定**

ユーザの役割設定も考えなければならない。規模が大きい企業ほど EIP システム管理者に、より負担がかかってしまう。ましては数千、数万人規模の企業では、システム管理をしている部署内での EIP システム全体の管理は、限りなく不可能に近くなる。全社的に使用する段階になることを想定できる段階になったら、各部署、部門でのサブ管理者的なユーザを育成しなくてはならない。サブ管理者的なユーザは、各部署内での EIP 活用の分析

を行い、ビジネスコミュニティや、誰がどのようなナレッジを持っているかを、把握しなければならない。それによって、ナレッジを共有すべきコミュニティの、論理設計が見えてくる。各部署内でのコミュニティの論理設計が、しっかりしていれば、部署内でユーザの困惑がおきることはないのである。

### 3. EIPのアーキテクチャ

#### 3.1 基本的な構成

では実際 EIP の構造を見てみよう。図2が EIP の基本的な構成図となる。

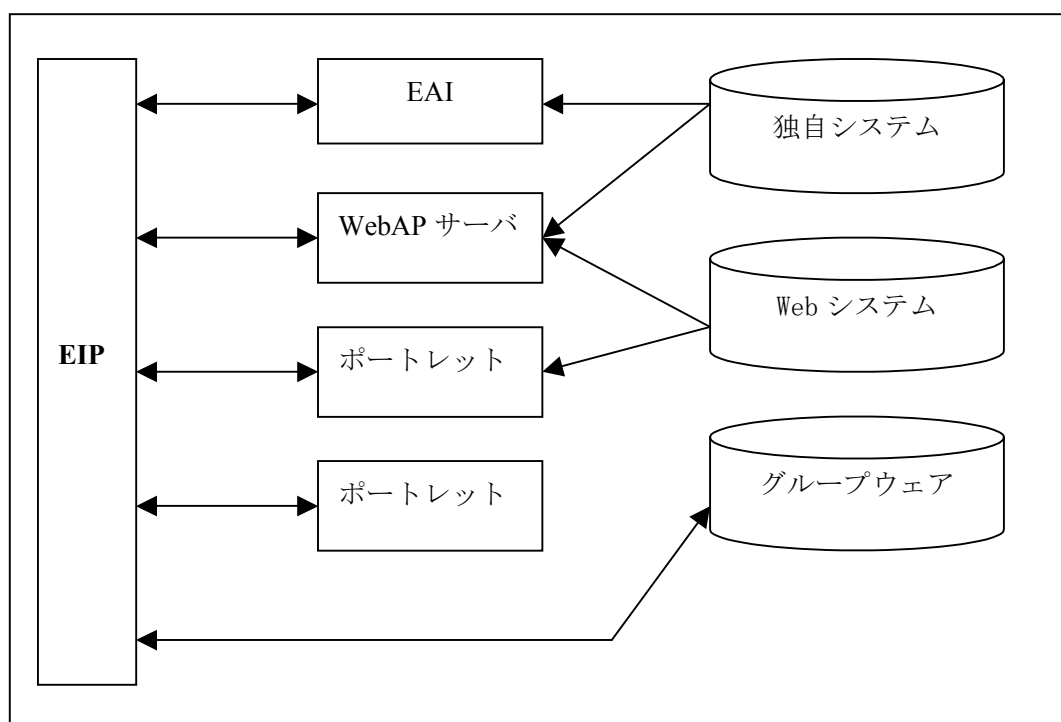


図2 EIPの基本的な構成図

図2を見ていただければわかると思いますが、まさに EIP とは総合アプリケーションの入り口なのである。EIP はアプリケーションの簡素化された結合空間で社内、社外から必要に応じて情報を取得し、個別のアプリケーションの出力を、EIP という場所で行うだけである。これらはポートレットという窓の中にあるだけでアプリケーションの連携を行うのは人間である。ユーザが自由に解釈して情報の交換ができる。つまりは必要最低限のアプリケーション統合ができるのである。

(1) 画面構成

利用者からみる EIP の画面は、以下の図 3 になる。

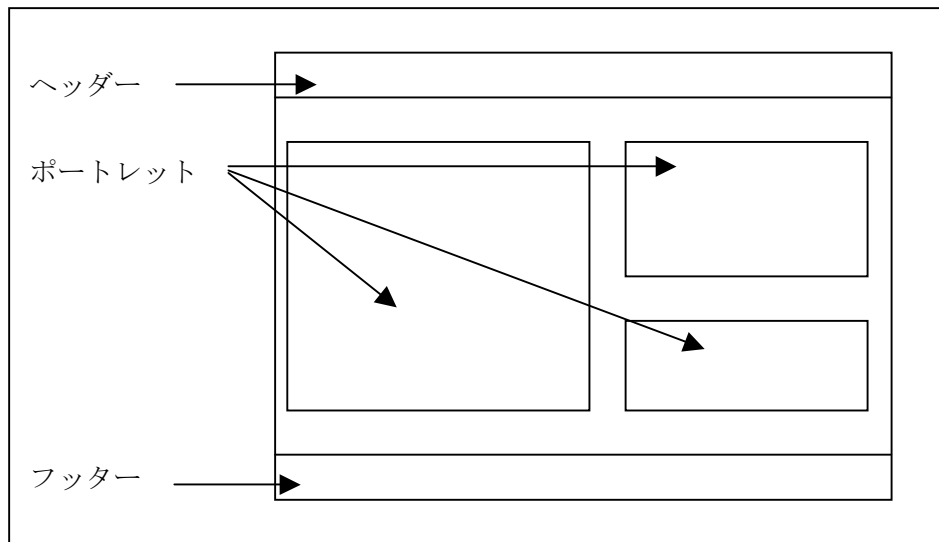


図 3 EIP の画面

製品によって微妙に内容は異なるが、基本的な画面構成はこのようになる。ヘッダー、フッターは主に EIP の基本機能のメニューとなっており、ポートレットはコンテンツ(中身)を意味している。

(2) システムアーキテクチャ

EIP の基本的な構成図は、以下の図 4 になる。

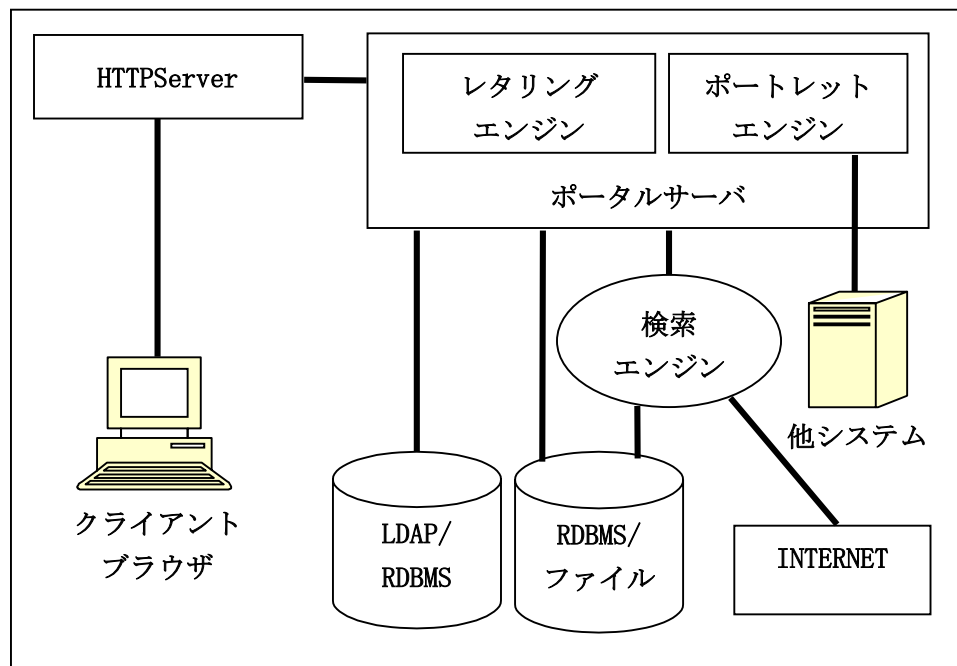


図 4 システムアーキテクチャ

EIP はポートレット処理を行うポートレットエンジンと、各ポートレット処理からページ構成するレタリングエンジンから、構成される。この二つのエンジンが EIP の基本的なエンジンとなる。また商品によっては、検索エンジンを使用しているものも少なくない。検索エンジンは、各ファイルの全文検索やインターネット上での検索機能を持っている。

### (3) EIP の基本機能

実際 EIP の基本機能は、次のような機能をもっている。

#### a. パーソナライズ

基本的な機能の一つで、ユーザが自分用のページを持ち、自分に必要な情報を、ページ上に配置するといった機能である。

#### b. ユーザ・グループ管理

EIP にログインできるユーザを、管理する機能である。名前やパスワードを管理する。複数ユーザを取り纏めたグループという概念を導入している製品も多数ある。ユーザ、グループの管理に LDAP(Lightweight Directory Access Protocol)を利用しているものが多い。

#### c. ユーザ権限・セキュリティ

ユーザ・グループには権限がある。この権限とは、アクセスできる権限やコンテンツに制限を加えることができる。権限の単位や権限の割り当ては製品によって異なっている。

#### d. シングルサインオン

ユーザは一つの ID を入力するだけで、他の連携するシステム ID を入力することなくログインを行う機能をさす。

#### e. ドキュメント管理

企業のナレッジマネジメントを目的としている EIP では、ドキュメント管理や閲覧、ドキュメントのアップロード、世代管理などの機能、全文検索の機能が代表される。

#### f. ポートレット管理

ユーザがポートレットの利用を可能とするために、EIP 管理者が配置する設定を行う機能を指す。

EIP の基本機能は、上記の 6 機能になる。

## 3. 2 EIP の技術

EIP と他のシステムの連携を構築するうえで、必要となる技術要素を以下に挙げる。

### (1) JAVA

サーブレットエンジンを採用している EIP では、ポートレット開発において、JAVA の知識は必要である。これらの製品には、JAVA API が、用意されている。それを利用することによって、開発者が色々なシステムと連携を行うポートレットを開発する。Microsoft, IIS ベースの EIP では、VBScript, JavaScript, ActiveServerPages を利用して開発を行えるものがある。

(2) XML

EIP サーバの設定ファイル、通信フォーマットなどに XML が利用されている製品が多い。

(3) Web 技術

複数の EIP サーバを構築した場合、EIP サーバ間の通信技術は HTTP を使用するものが多い。

## 4. EIPの社内展開

### 4.1 EIPの完成を目指して

EIP の導入を決めたら「どこに情報があり、誰がどのようにサービスを提供するのか」という完成形を、定義する必要がある。ポートレットやアプリケーションを構築して必要最低限で最大限のサービスを行う。結合できるデータは極力統合し、既存のDB、アプリケーションから取り出せる情報を極力使用することにより、既存システムの再利用が可能となる。だが完成形とは、常に変化が必要である。つまり、EIP プロジェクトは、一度構築して終わりではない。ユーザの利用状況を見ながら、常にブラッシュアップしていかなければならない。それには導入効果の評価、他部門への展開、必要機能の見直しや追加を考えなければならない。

### 4.2 EIPに期待されていること

EIP には、大きく分けて二つの効果が期待できる。まずは、統制による無駄の排除である。場当たり的で統制なく保管・整理されていたナレッジを、統一的なコンテンツ管理下に移行することにより、管理工数の削減が可能となる。社内文書は統一された場所に格納される為、社内文書探しに各サーバを参照する必要が無くなるのである。一度の探索時間は少しの時間だが、年間で考えるとかなりの工数削減に繋がるのである。二つ目に、個人の処理能力の向上である。EIP を利用することによって、知識の共有が促進され、社員個々のスキルアップに期待がもてる。他の作成者の文書をコラボレートすることによって、メリットのみを利用することが可能となる。例えば、見積書を作成する時に、過去の類似した文書を参考にできれば、より正確なものを作成できる。ここまでは、EIP を利用しなくてもあたりまえの行動だが、EIP を利用しない場合は、このコラボレートを行う、行わないが、個人によって異なっていた。EIP を利用することで、少なくとも類似した文書が、目の前に存在するので、EIP 導入前よりも、コラボレートしやすい環境が整っているのである。また作成した自分の文書も、他ユーザが活用していくことで、文書のメリットだけを、どんどん引き出せるようになる。その結果、個々のアウトプットの質の向上が、図れる。

上記の内容で、EIP を導入すればどういった効果が得られるか、わかんと思う。



## 5. おわりに

### 5.1 課題と可能性

現在、世の中には色々な EIP 製品が登場してきている。幸いなことに、多くの試用版がリリースされており、実際自社のニーズに合ったものかどうかの評価ができる。EIP ツールにはタイプがあり、目的に相応しいツールを選択することが大切である。この論文のはじめにも書いたが、まずは何をターゲットと置いて導入するかが、一番目のポイントとなる。何を期待するのかを、明確化するのである。更に、自社がどのような施策、つまりはコスト削減、収益増加などを重視するかなどが、大事な要素となる。導入にあたっては自社の事情、狙いに合わせた指標を、選定すべきである。

EIP の導入するか否かの、検討を進めるにあたって確立しなければいけないポイントとして、業務の効率化の追求、ナレッジマネジメントの高まり、社員のパワー促進、柔軟な業務プロセス変化への対応などがある。まず業務の効率化の追求だが、これは情報のリードタイム、アウトプットタイムの短縮、の追及を指す。次にナレッジマネジメントの高まり。これは顧客ニーズ、各種情報の全社的な共有と再利用に対する欲求などを意味する。社員のパワー促進は、利用価値を提供するために自律的に動ける組織・人材の育成の促進である。最後に、柔軟な業務プロセス変化への対応は、ナレッジワーカーの非定型業務の効率化を目的とする。これらの対応や課題解決しなければならない状況になった場合に EIP を検討する必要があると私は考える。

EIP を導入することにより、メリットとして4章で述べた効果が得られる。しかし、デメリットになるかは、運用次第であるが、無計画に導入したのでは、ただのコンテンツのリンク集、アプリケーション起動の場だけになってしまう。だが、EIP を業務遂行の場の入り口と考え、企業内ナレッジの整理ができれば、ユーザ主導の自律的な業務遂行へ移行することができる。トップダウンの指揮命令系統から、ユーザによる業務遂行形態へ移行できる。IT 化した業務プロセスの定義、改善までもユーザに委譲することができるのである。

導入の課題としてはナレッジマネジメント施策の策定、ユーザ(コミュニティ)の把握、情報資産(コンテンツ)の整理があり、これらをクリアしていかなければならない。対策としては、基準を作成し、エンドユーザを誘導して、発生した問題を迅速に解決し、運用していくことが大事である。EIP 導入プロジェクトに、関係者を集めたチームを編成し、どう EIP を運用していくか検討する必要がある。とりわけエンドユーザを、どこまで巻き込めるかによってこの導入プロジェクトの成否が関係するであろう。

最後にEIP導入プロジェクトは、単発のプロジェクトではなく、いかに継続的にスパイラルアップをしていくが、重要である。

## 参考文献

- [1] 宮原 俊一：“ポータルシステム構築ガイド”，月刊DB Magazine，  
No. 153, (2002. 7), PP82-100